

構成世帯数：2,944 世帯（令和3年4月末現在）

「地域の底力」事業を活用し市民の交流を広げる

「ささえあいフェスティバル」に子どもからお年寄りまで

●ポイント

- ・子どもやボランティアが参加する「ささえあいフェスティバル」で大勢の人々を集め、自治会の活動を広く市民に知ってもらう。
- ・縄文時代から続く地域の歴史と文化を子どもたちに伝える活動を通し、学校や若い子育て世帯にも自治会をアピール。
- ・新しい人をより温かく迎え入れるなど、自治会自体が変わっていくことも必要。

「明るく、楽しく、元気よく」をキャッチフレーズにまちづくり

第八支会の母団体となる青梅市自治会連合会は、昭和35年（1960年）に発足。令和2年（2020年）で60周年を迎え、全部で11の支会から構成されている。第八支会（東青梅・根ヶ布・師岡町地区）は、昭和41年（1966年）に第三支会（吹上・野上町・大門・塩船・谷野・木野下・今寺地区）から11の自治会が独立して、新たな支会として活動が始まった。現在の第八支会は15の自治会で構成され、2,944世帯（令和3年4月末現在）が加入している。

第八支会では、発足当時から「明るく、楽しく、元気よく」をキャッチフレーズに活動を継続。会員相互の親睦と連携を図り、地域の自治行政を円滑に運営するとともに、市の行政に協力して各種事業を運営してきた。

平成28年（2016年）には、創立50周年を記念して「第八支会ささえあいフェスティバル」がスタート。令和2年（2020年）は新型コロナの感染拡大防止のために中止になったが、例年多くの市民が参加する賑わいのある行事として、定着しつつある。

「ささえあいフェスティバル」に大勢の市民が参加し交流が拡大

このフェスティバルは、それまで毎年、東青梅市民センター（青梅市師岡町）の体育館で実施していた展示中心の文化祭を、屋外の駐車場なども利用したイベントに発展させたもの。令和元年（2019年）には10月26、27日の両日に「東京都地域の底力発展事業助成」を活用して開催し、保育園児や小中学生、自治会員有志による絵画などの作品展示をはじめ、2日目には駐車場に設けた演技スペースで保育園児による鼓笛演奏に続いて地域団体がダンスや阿波踊り、お囃子、かつぼれなどを次々に披露。また、関係団体による模擬店等も出され、2日間で約1,200人の人たちが楽しみながら交流を深めた。

参加した団体は、小学校と中学校（各 4 校）、保育園（4 園）、青梅警察署、青少年対策第八支会地区委員会、青梅交通安全協会第 8 支部、第八支会地域の安全を守る会、東青梅地区環境美化委員会などの各機関に加え、ボランティアなど 7 団体、さらに演技披露にはかすみ保育園鼓笛隊、キッズダンスのカラフルレイン、大江戸ダンスの Full of Courage、青梅うぐいす連（阿波踊り）、師岡囃子連（お囃子）、梅雀会（かっぼれ）の 6 団体が参加し、多くの市民を巻き込むことに成功している。

「自治会に加入しなくても困らない」と考える若い世代との溝を埋める

この催しについて、青梅市自治会連合会常任理事である第八支会支会長は、「地域の皆さんの自治会活動への着目度が高まり、新規加入に結び付いていると思う」と語る。特に、保育園児の作品展示や、子どもたちのダンスの披露などは家族で見に来るので、子育て世代が自治会活動を実感する良い機会となる。

第八支会としてこうした取組に力を入れる背景には、自治会活動に関心を示さない人たちが増えていることがある。連合会が異なる世代の人たちを招いて実施した座談会では、30 代、40 代など若い世代から「自治会にメリットを感じていない」、「加入しなくても困らない」という意見が出たとのことで、「若い世代は自治会活動に参加しなくてもスマホやパソコンで情報が得られる。地域とのつながりをあまり持たたがらない傾向が見られる」と支会長は分析する。「これからは、いいことがある、楽しいことがあるとメリットを提示していくことも必要」と指摘する。

若い世代との意識のずれをどう解消していけばよいか。「今までの自治会には、高齢者がいて若い人が入りにくいというイメージがあるが、自治会自体が変わらなくてはならない。新しい人を温かく迎え入れ、入りやすい雰囲気を作ることも大切」（支会長）と説明する。

子どもたちに地域の歴史と文化を伝える

もう 1 つ、都の「地域の底力発展助成事業」の一環として、第八支会が取り組む活動に地区内の小中学校を対象とした「学校連携事業」がある。これは、第八支会が創立 50 周年の記念誌発行のために地元の歴史を調べ、その成果をぜひ地域の子どもたちに伝えたいと「子どもたちに地域の歴史と文化を伝える会」を結成し、毎年、出張授業を実施しているもの。

令和元年度は小学校 1 校、中学校 2 校を訪問して授業を行い、コロナ禍となった令和 2 年度も中学校 1 校は資料の提供のみとなったものの、小中学校 3 校で授業を実施した。

教科書には載っていない地元に着した情報を伝え、すぐ近くの公園のある場所から矢尻などが出土していることや、市民マラソンの草分け的な大会である青梅マラソンがオリンピックとつながりのあることなども紹介。子どもたちに感想文を書いてもらっているが、「地域の文化などをちゃんと守っていききたい」などの声が寄せられ、自分たちの町を誇りに思う気持ちが育っている。

「子どもたちが家庭に持ち帰り、話題にすることで家族も含めて地域への関心が高まればと期待している」と支会長。授業では「お父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃんにぜひ伝えて欲しい」と子どもたちに呼びかけていて、子育て世代の世帯に、自治会活動を理解してもらおう効果が期待される。

「無事旗」を使った安否確認訓練やお得な「すまいるカード」も工夫

自治会の担い手の高齢化が進む今、新規加入者や担い手の育成は、第八支会としても喫緊の課題となっている。支援の必要な高齢者等に対して、「要支援者カード」を独自に作り、支え合いに役立てているほか、防災訓練では「無事旗」を取り入れた安否確認訓練も組み入れるようにした。そうした地域の安全・安心を高める自治会活動に対して理解を深めてもらい、新規加入につながることも期待している。

また、連合会では自治会員の特典として、「すまいるカード」の制度も設けている。これは、青梅市内の107店舗が参加。すまいるカードを使うと、店によって3%割引になるとか、飲食店では無料のつまみを提供するなどの特典がある。大手スーパーは未参加だが、地元スーパーが1店協力している。

こうした様々な工夫のほか、不動産業者にも物件の購入者に自治会参加を呼び掛けるよう、協力を求めている。20数戸の住宅が建ち、100%加入した例もあり、第八支会では不動産業者との連携も重視している。

従来の延長ではない新たな取組に試行錯誤も必要

ただ、第八支会として、新規加入の促進や担い手不足解消について、すぐに効果が上がる決定的な方法を見出しているわけではない。「どうしたら加入してもらえるか、悩んでいる」と支会長は率直に語る。

連合会によれば、各自治会の加入率にはばらつきがあり、祭り（青梅大祭）に関係する自治会では、自治会の加入者でなければ祭りに参加できないことから、90%程度と高い加入率を維持している。「何か地域の結束を高める目玉となる活動があると加入率が高まると考えられる」と支会長。「今はまだ答えが出ていないが、従来の活動の単なる延長では続かない。試行錯誤が必要」と説明する。とはいえ、「ささえあいフェスティバル」や「学校連携」などの新たに始めた取組が地域の世代間の心をつなぎ、地域の底力を高めつつあることは確かで、今後の期待される。



ささえあいフェスティバルの様子



「子どもたちに地域の歴史と文化を伝える会」の出張授業



防災訓練（安否確認訓練）で取り入れた「無事旗」